

# 自己を知ることについて

大 畠 た ね

人を援助するためのすぐれた知識と技術を身につけながら、実際になると理論と實際が遊離してしまう人がある。時には、援助者が知らずに相手を傷つけるような事をしたたり、言つたりすることもある。これらは援助者が自己を知らないために起ることが多いようである。被助者を理解することの必要については、常に聞かされているが、援助者が自分自身を理解する事の必要については、それほどきかされて来なかつたように思える。相手を理解するための理論や知識は自己のためにもあてはまるのである。

自分を冷静に客観的に眺めて研究することは、案外むづかしいものである。一般に自分の欠点はあまりはつきり知りたくないで、目を閉じて見のがしたくなる傾向がある。援助者の人格や態度は、社会事業教育訓練の過程で取り上げられるべき問題である。人を援助する職業に就く人は、その終了までに人格の成熟をはかり、態度の制御を身につけるべきである。然しこのような訓練を受けずに仕事に就いている人も多数ある。援助者は出来るだけ自分を客観的に眺め、現実の自己を把握していることは援助者としての責任である。

援助者がどんな人であるかということとは、相手との援助関係を決定するものである。人間関係はケースワークの基礎となるものである。面接や問題の処置、言いかえればケースワークそのものの成功するか否かは、ひとえにこの援助者と被助者の間の関係いかによるといつても過言ではない。

援助に於ける相互関係の性質について一言すれば、これは援助者にとって意識的、一方的なものである。援助者は

相手に与えるのみで、それにたいして何も期待しないのであるから友情のように与えたり、与えられたりする関係とは異なっている。

援助者の人格、態度はこの援助関係に大きく影響する。これは必要な知識や技術を身につけただけでは、よき援助者にならないと言われるわけである。援助者は相手との間の関係の発展を妨げるような自分の偏見や欲求を発見して仕事の妨げとならないようにしなければならない。偏見など持ったこともないし、専門家としての態度も身につけ、立派な仕事をしているという自信のある人も、人間である限り種々の欲求を持つてゐるのは当然である。人に認められたい、関心をもちたい、よく思われたい、愛されたい、自分の思うようにしたい、人を支配したい等様々ある。これらの欲求を援助者が持つてゐること自体は別に問題にはならないが、それらの欲求を被助者との関係によつて充そうとするとき問題となるのである。たいていの場合専門家らしく、被助者を公平に受け入れ、誰とでも、うまくやつていける人でも、時にはどうしても辛抱出来ないという相手に出合うこともあるだろう。

人は生活してゆく便宜上、生活の型をつくりあげるものである。援助者の嫌いな型の行動をする人に出会うと、いらいらしたり、腹がたつたり、不愉快になり、ついに辛抱出来なくなる事もある。援助者が相手をただ嫌いだと思つてゐるだけなら問題にはならないが、問題となるのはその氣持が相手に反映された時である。援助者が、自分の偏見や欲求に気がつかず、知らずにそれらを援助の場にもち込むところに危険がある。援助者は、被助者との関係を妨げるような偏見や欲求を発見し、その原因を求めるように努めるのである。自己を客観的、現実的に眺めるのである。被助者にたいする自分の態度や行動を客観的に見ると相手から個人的満足をどの程度求めているかがわかるだろう。いくら客観的に自己を検討しても、本人の欲求がなくなるわけではない。又偏見をすてるわけにはゆかないかもしれない。けれどもそのような欲求や偏見を意識する事により、被助者との関係がそれによつて影響されないようにする事が出来るのである。援助者は常に被助者との間の関係をさまたげる自己の偏見や態度を発見し、その原因を探究し、それらを除くか制御する努力をしなければならない。